

## 立ち直りに寄り添うとは

西条市立東予東中学校 3年 藤田一花

私の父が勤めている職場には、年齢や出身、国籍も違う様々な人たちが在籍しています。その中には前科がある人も少なくはないそうです。

3年ほど前、刑務所に服役していたAさんという方が父の職場で働き始めました。作業に慣れるまで時間は掛かったけれど、仕事はとても丁寧で、毎日誰よりも早く出勤し、一番遅く帰る生活を続けていたそうです。職場のみんなは真面目で優しいAさんを慕っていました。その頃のAさんに、私も一度会ったことがあります。柔らかな物腰から、温かい人だと感じました。

ようやく仕事にも慣れてきた頃、Aさんは突然仕事を辞め、誰も連絡が取れなくなってしまいました。後から分かったことですが、Aさんが辞職した理由は、同じアパートの住人たちから退去の催促をされ、それに嫌気がさしたからだったそうです。職場のみんながAさんの辞職に戸惑いました。理由を知った私もその話を聞いたとき、やるせない気持ちになったことを今でも鮮明に覚えています。

Aさんの辞職からかなりの時間が経ち、父は再びAさんと連絡が取れるようになりました。今回、私が社会を明るくする運動の作文でAさんのことを書きたいと父に相談すると、父はAさんとの食事に連れて行ってくれました。久しぶりに会ったAさんは以前と変わらず優しく、「作文に書いてくれて嬉しい」と、辞職した当時のことをたくさん話してくれました。

アパートでは、周りからいつも白い目で見られていた。近くを通れば避けられ、聞こえる距離で心無いことを言われた。でもそれは当たり前であって、自分がここに住んで申し訳ないと思っていた。そんな中で職に就けることになった。やっと就けた仕事だから頑張りたい。でも人との付き合い方が分からない。不安を抱えながら仕事を続けていたが、職場の人は優しく、ここで働けて良かった、仕事が楽しいと思えるようになったが、自分が楽しんでいいのかという思いが常にあった。職場の人たちは温かく接してくれるが、アパートの住人たちは自分をよく思っていない。だから、毎日一番遅くに職場を出て、歩いて時間を潰し、深夜にアパートに帰る。朝早くにアパートを出て、誰よりも早く出勤する。とにかくアパートにはいたくなかった。そんな日々の中で、ある日、父と一緒に私と会うことになった。近所の子どもたちからかわれたり、保護者の目や態度が気になったりして、自分からは関わってこなかった。だから、私と初めて会うときは怖かった。でも、そんな風に思うのは相手に失礼だ。相手のことを勝手に決めつけるのは、あのアパートの住人と同じだ。そう思って、私と会うことにしたそうだ。

Aさんのこれまでのことを聞いて、私は気持ちを言葉にすることができませんでした。私は父の仕事の辛さを知っています。怪我也多く、体力も精神力も必要な仕事です。毎日誰もいない職場に行き、疲れた体で暗闇を歩くAさんは、どんな気持ちでいたのだろうと、アパートの人たちへの怒りも湧きました。しかし、Aさんの最後の言葉を聞いて、私自身もはっとさせられました。それは、会って話をするまでは私もAさんを「怖い」と思い、服役していたことがあるという良くないイメージで見えていたからです。

私たちは、自分の想像や思い込みで人を判断してしまいがちです。その人のことを知ろうとせず、先入観を持って他者と接することは、いつしか差別や偏見につながります。大切なことは、相手の経歴や過去にとらわれず、今自分の目の前にいる人と向き合おうとすることだと思います。私はAさんと実際に話をしてAさんの優しさを知りました。アパートの人たちも、もっと話をしていればまた違う結末があったかもしれません。

人は何度でもやり直せる。けれど、立ち上がるためには場所と周りの手助けが必要です。Aさんは、「逃げる場所を間違えず、周りの人、自分を大切にしてくれる人を大切に。」と教えてくれました。私はこれから、誰に対しても進んで話をしようとする、しっかりと言葉にすること、そして言葉を大切にすることを心掛け、周りの人たちに寄り添っていきたいと思います。

父とAさんは、今もたまたま食事に行き、他愛もない話をするそうです。誰もが互いに、友人として笑いあったり、

楽しく食事ができたりするような、そんな明るい社会になることを願い、私も目の前にいる人と向き合って、大切にしていきたいと思います。